

青い鳥「できた」重ね

「よっしゃ、頑張ろうぜっ」
。六月下旬、部活動の時間になると、ユニホーム姿の部員たちがグラウンドに駆け出す。二年の白子悠樹さんが笑顔を見せた。

「中学で野球をやりたいかったけど、障害があるから学校に断られちゃいました。野球ができることがうれしいし、うまくになりたい」部の前身は「球技部」。ソフトボールやバスケットボールなどの球技全般をする部活動が、硬式野球をするようになったのは二〇二一年になってから。野球をしたいという生徒の声を受け、同年着任した久保田浩司監督(全)が「平等に野球をやる機会が与えられるべきだ」と学校に提案した。

だが、安全面での懸念から反対が強かった。「ベースランニングだけがをしないよう、塁の横に教員が立って見守る」「バットは放り投げない」など細かい練習報告書を毎月、学校に出し理解を得た。都高野連が今年五月に加盟を承認、公式戦出場への道が開けた。今は部員十七人のうち六人が、硬式野球に取り組む。

当初、部員たちはキャッチボールができず、フライが捕れない。ルールの理解もままならなかった。「十球中九球エラーしても、一球でもうまくいったら、そこを褒める。『できた』という成功体験

東京都内の特別支援学校として初めて、夏の甲子園出場に向けた一步を踏み出した都立青鳥特別支援学校(世田谷区)ベースボール部。キャッチボールさえできなかった生徒たちは「野球をやりたい」と練習に打ち込み、一つずつできることを増やした。決してあきらめなかった監督が、それを支えた。(昆野夏子)＝〇面参照

高校野球

特別支援校で初 連合チームで都大会へ



が、次のやる気にもつながる」。久保田監督はあきらめなかった。今では、部員たちは素早く捕球体勢に入り、「オーライ、俺が捕る」と声をかけて捕球できる。打球判断は苦手な部員が多い。走塁練習でも、一つのプレーを巡り議論が白熱する。「今のはヒットになるからゴウで良かったよ」「いや、アウトになるから走っちゃだめ」「俺は違うと思う」。久保田監督は「自分たちで考えないと体が覚えられないので、話し合う時間を設けている」と話す。

大会には、松陰大付属松陰高と都立深沢高との連合チームで臨

む。青鳥から参加する六人の一人、三年の山口大河主将は「障害者と一緒やるなんて、迷惑」と差別されないか心配だった」と明かす。心配は合同練習を始めて吹き飛ばす。山口さんは「同じ選手としてアドバイスをくれるからうれしいし、打ち解けられた」。深沢高一年の山田哲平さんも「普通に野球ができるし、特に抵抗はなかった」と話した。指導者も思わぬ成果を感じている。深沢高の宇野秀和監督(全)は「(青鳥の)練習に熱心に取り組む姿勢は尊敬できる」。久保田監督は「グラウンド整備などを自分たちでやるようになった」と目を細める。まずは「試合に出る」が目標の青鳥の部員たち。十日の初戦を前に「思い切って野球をしたい」と心躍らせている。

守備練習をする部員＝6月28日、東京都世田谷区の青鳥特別支援学校で